



## アクションカードを導入した救急救命 —組織的に動ける危機管理体制づくり

(後編)

読み切り

島根県 出雲市立灘分小学校 足立 早織  
出雲市立第一中学校 清水 千景  
出雲市消防本部 吉井 友和

私たちは、救命処置の際の連携強化を図るために、そのときにすべき行動をカードにした「アクションカード」を作成しました。今回の後編では、アクションカードができた過程と、カードを用いたシミュレーション講習に焦点をあて、その有用性を紹介します。

### アクションカードができるまで

#### 救命処置の課題解決に向けて

2010年、救命処置の校内職員講習の企画を任せられたとき、企画を立てるにあたって、地元の消防本部に協力をお願いしました。

その際、実際に起こり得る場面を想定した「シミュレーション講習」を提案し、指導のお願いをしたところ、快諾していただきました。

シナリオを作り、校内で講習を実施したところ、これまでの手技中心の講習だと思って参加していた教職員は、この講習に戸惑い、焦り、右往左往していました。

講習を進める中で、次第に参加した教職員は場面ごとの対応を真剣に考え、動き、声を出し合うようになっていきました。実際に起きたときのことを考えられるようになり、結果として危機感や課題意識が芽生えたと思います。

#### きちんと行動にうつすために…

講習終了後に振り返りを行ないました。救急救命士、校長、教頭、保健主事、養護教諭が校内の救急体制上の改善策を練る中で「頭で分かっていることが行動でき、連携を強化するにはどうしたらいいか」という課題が出ました。その際「消防も大規模災害の際に使っている、アクションカードの学校版を作成してはどうか」という案が出ま

した。そこでカード作成のためのワーキンググループを立ち上げ、消防本部に協力と助言をお願いしました。

#### 試行錯誤の末、カードができました

カードを使えるものに仕上げるために、試作品を使った講習を約4カ月間に5回行ないました。Plan（計画）→Do（実行）→Check（検証）→Action（改善）のPDCAサイクルを通してカードの改良を重ね、現在使用しているものの基となるカードができました（カードの実物は、前月号の前編P.41参照）。



カードの作成にあたって、消防本部の指導と示唆に富んだアドバイスは必須でした。

講習を行なう中で気づいたのは、多忙な教育活動の中で、教職員の理解を得て充実した講習にす

るためには、消防本部との打ち合わせが欠かせないということでした。

研修の進め方や想定する場面などについては、校内の実態や現状を踏まえ、何度も打ち合わせを行ないました。想定として取り上げる場面は、最近校内で実際に起こった外傷や、一つ間違えば命にかかる食物アレルギーなどをテーマとして選び、教職員の危機管理意識が高まるようなプログラムになるよう工夫しています。

### カードを用いた講習の感想

できあがったアクションカードを用いた講習の様子は、前月号の前編P.42~43の「シミュレーション講習の様子」を参考していただければと思います。中学校では、このカードを用いた講習の感想として、教職員より以下のような意見を聞くことができました。

\* \* \*

- ・初動対応の際、焦ることを実感した。
- ・実際には、1人では対応できない、たくさんの役割があることが分かった。
- ・全体の動きを確認することができ、カードを活用する意味が納得できた。
- ・カードがあれば、何をすべきか明確で、漏れがなく、優先順位が分かりやすい。
- ・あわてたときに頼りにするものがあることは、心強いことだった。
- ・消防本部が指導・監修をし、一緒に作ったカードなので、安心感がある。
- ・カードがあることで、周りを気にせず心肺蘇生に専念できた。
- ・リーダーが決まることで役割が明確化され、動きやすかった。
- ・行なった手当てや状況等をスムーズに救急隊員に引き継ぐことができた。
- ・自分の役割を確認しながら、迷わず、自信を持ってできた。

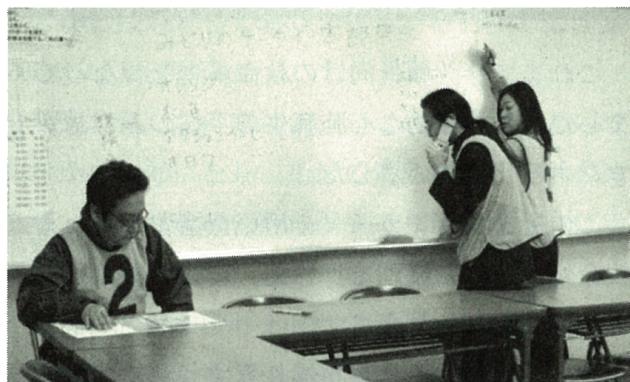
・職員室にも現場の行動などが記録されているので、関係機関への報告や後の検証が行ないやすかった。

\* \* \*

危機等発生時に「仲間が駆けつけてくれる」と確信できれば、それが養護教諭の支えとなり、傷病者への対応に専念できます。また、校内で組織的な対応ができれば、救命のリレーはスムーズに行なわれます。

講習から得るヒントや意見は「実際に役に立つ救命処置」のために欠かせません。

毎年、異動によりメンバーが変わる年度初めにシミュレーション講習を行ないます。今では、春の恒例行事として定番化しつつあります。



### 実際に事故が起った…！

カードを活用した講習を行なってからしばらく経ったある夕暮時、部活動終了間際に生徒が体育館で腰部を打撲し、動けなくなりました。

教職員は、講習で行なった通りにアクションカードを用いた対応をしました。現場には素早く職員が集まり、それぞれの役割を果たしました。必要な物品がそろうのも早く、ほかの生徒を適切な場所に移動させることができ、ケガをした生徒をスムーズに救急隊員に引き継ぐことができました。

救急車が動き出す頃には日も暮れていましたが、脇道から本道まで職員が並んで、誘導灯を振りながら見事な交通整理をしてくれました。

この姿を見ていると胸が熱くなりました。

「これまでも協力体制をとって、迅速な対応をしていたつもりだったけど、いったい何が変わったのだろう」と不思議な感覚をもちました。

生徒の診察が終わって学校に戻ってみると、職員室のホワイトボードには、処置や行動がしっかりと記録されていました。

生徒の無事を願いながら待機していた教職員と互いの労をねぎらい、災害の発生や対応について、それぞれの立場から意見を交わしました。

周囲を包む温かい雰囲気にホッとするとともに、「いい仲間に支えられているな」「一緒に講習をしておいてよかったな」とつくづく感じました。

#### カードを使うようになって変わったこと

これまでも教職員向けの救命講習を行なっていましたが、一般的な心肺蘇生の手技のみの講習でマンネリ化していました。

このアクションカードを用いた講習を行なえば、救命処置全体の流れを押さえ、自分のやるべきことがはっきりしてきます。

カードを用いた講習を繰り返すうちに、危機が発生したときの行動や活動の流れを理解している者が増えました。

救急車要請とまではいかない病院搬送の場面でも、なるべく多くの教職員が現場に集まり、「私はこれをします!」「○○先生は、これをお願いします!」というように声を出し合って役割を分担したり、時系列で必要事項が記載された記録が残るようになりました。

養護教諭は、傷病者の対応に専念することができ、心強く感じています。

#### 講習後の校長室で～救命士のつぶやき～

「いや～、管理職として、やるべきことがカードに記載してあるのって、非常にありがたいですね～、助かります!」という校長先生や教頭先生

の感想をよく（必ず！？）聞きます。

アクションカードの必要性は、講習が終わったあの校長室で、校長先生、教頭先生、養護教諭と私の4人でお茶を飲みながら、本音で話し合っているときに実感できます。実は管理職の先生のほうが、アクションカードの必要性を強く感じてくれます。

それはなぜか…? 出雲市立第一中学校と試行錯誤し作り上げたアクションカードには、実際の手当てや通報、記録、救急車の誘導など、養護教諭や一般の教職員が「現場」で行なうことはもちろん、管理職が傷病者発生時に行なう初動対応、指示、連絡先なども盛り込まれており、学校のあらゆるニーズが満たされているからだと考えます。

「カードを使わないときは、講習と分かっていてもあわてました!。実際のケースでは、もっとあわてます!。でも、アクションカードがあれば行なうべきことが優先順に書いてあり、とても頼りになります!」という校長先生、教頭先生の感想は本音であり、講習の効果であると考えます。



先日、ある小学校へ講習に出向きました。この小学校は、3年間、とても熱心な校長を中心に、毎年継続的に講習を行なっておられ、講習で出た課題を後日の職員会議で話し合い、改善策をまとめ、消防本部にきちんと報告してくださる素晴らしい小学校です。

市外から異動てきて、初めて講習を行なった教頭は、講習後の校長室で「びっくりしました!。一般の教職員がこれだけ動けるとは! こんなに

危機管理意識が高い学校は初めてです！」「自分たちは管理する立場ですが、的確に指示を出すのは難しい…。アクションカードがあれば、教職員全員が補い合えるところが魅力的で、とてもありがたい！」と絶賛されました。

その横にいた講習を3年間続けてきた校長先生の「してやったり顔」が忘れられません（笑）。

### ～養護教諭のつぶやき～

救急体制にアクションカードを取り入れることにより、私たちの“困った！！”が軽微になっていき、危機発生時にすべきことを過不足なく行なうことができるようになりました。

それは、従来、養護教諭が一人で抱えていた救急現場でのジレンマが、アクションカードの導入

（役割が分担できるようになること）で解消され、子どもたちの手當に専念することができることによるものです。

前回もお伝えしましたが、アクションカードを取り入れた救命講習は、教職員の意識を高めるのに大変効果的です。この講習の結果として、危機管理や救命処置について、管理職と一緒に対応を

考えることができます。それは組織的に動ける危機管理体制づくりにつながり、「救命の連鎖」へ波及していく…と考えています。

\* \* \*

ここまで2号連続で、アクションカードを用いた救命処置の利点を紹介させていただきました。ただ一点だけ述べておきたいことは、アクションカードは、救急体制における補助的なツールであり、このカードさえあれば、すべてがうまくいく…というわけではないということです。カードを校内の救急体制に導入するためには、計画的・継続的な研修を繰り返す必要があります。

また、地域や学校による違いもありますので、今回紹介したアクションカードをコピーして配布するなどはいたしておりません。その点、ご了承いただければ幸いです。

今回の私たちの原稿が、読者の先生方にとって何らかの参考になり、地域の消防本部などとの連携や、新たな危機管理体制づくりにつながれば幸いです。

最後に紙面を借りまして、地元の消防本部の皆様に感謝の言葉を述べさせていただきます。ありがとうございました。

(K・W)

### 終わりに～筆者3人からみなさまへ～

すべての教職員は、第一発見者となる可能性があります。そのときにどのように行動するか…。今回紹介したアクションカードは、事故が起きたときに、教職員の連携（校内緊急体制）をスタートさせるためのものです。

連携の中では、たくさんの役割が同時進行的に生じてきます。どの役割も、子どもを助けるために重要であることを覚えておいていただき、それぞれの学校の実情にあったカードを作成していただければと思います。

- 「第一発見者」のカードは、名刺サイズに加工したものを、教職員全員が名札の裏に入れています。



第一発見者	
1. 反応の有無を確認	
2. 大声で人を集め（生徒可）	
3. 119番通報の依頼とAEDの依頼	<ul style="list-style-type: none"><li>■ 反応の有無を伝え119番通報するよう職員室へ向かわせる</li><li>■ AEDを現場を持ってくるように依頼する</li></ul>
4. 呼吸を確認する	<ul style="list-style-type: none"><li>■ 胸やお腹が動いているか確認</li><li>■ 昔ほどおりの呼吸でなければ心肺停止と判断</li></ul>
5. 心肺蘇生法を開始する	<ul style="list-style-type: none"><li>■ 胸骨圧迫30回と（気道確保）人工呼吸2回を絶え間なく</li><li>■ AED到着後は、速やかに装着しメッセージを確認する</li></ul>